或問　WAKUMON　77
No.33,（2018）pp.77-90

近代日本人による中国語口語文法の研究
――介詞に関する記述を中心に

盧　驍

要旨：『大槻文彦解支那文典』（1877）の刊行後、日本の中国語文法研究は口語文法の研究という新たな段階へと進み、理論的に整理され、且体系的にまとめられた口語文法書が相次いで世に問われた。本研究では、明治、大正期に日本人研究者の手によって編述された中国語文法書群における介詞に関する記述を対象に、主として介詞の名称、所属、範囲について検討を加え、西洋文法及び日本語文法から受容した文法概念の影響の下で、日本人研究者が介詞のことを如何に捉えているかを究明しようとする。

キーワード：中国語口語文法書、日本人研究者、介詞の名称、介詞の所属、介詞の範囲

1. はじめに

日本における中国語文法の研究は江戸初期から既に始まっていると言われている。しかしながら、当時の漢学者らの手によって行われた漢文法の研究の多くは、あくまでも漢詩文における文修辞の説明及び儒学の経典における個別な虚字の解釈に主眼が置かれたもので、今現在でいう「文法」の概念を基に編述されたものとは言い難い。明治以降、西洋語学の影響を受けた近代的文法観の展開を背景に、日本の中国語文法研究も口語文法の研究という新たな段階に進み、江戸以来の漢文法研究と趣を異にする一側面を示し始めた。

本稿では、明治、大正期に刊行された中国語文法著述を主軸に、中における介詞に関する記述に焦点を当て詳察してみたい。まず各書において用いられた介詞の名称を通時的に考察し、これらの用語が一体いつごろの文献に見え、どのような意味で使い始められたかについて検討してみる。

次に、介詞の所属について、研究者がそれぞれの言語感覚によって、介詞を助動詞、助詞などに帰属させた理由を解明してみる。更に、各書に取り上げられた介詞の例語を種類別に整理分析を行い、日本人研究者がどのような性質を備え、どういった機能を有する言葉を介詞的なものと考えていたか、換言すれば介詞の範囲を明らかにする。それと同時に、日本人研究者らが西洋文法及び日本語文法から受け入れた文法概念を、如何に中国語の性格に応じて介詞の研究に適用したかという問題の解決も試みたい。

2. 介詞の名称

明治、大正期に編述された中国語文法著述において、所謂介詞と考えられる語に対する説明

に種々の名称が使われている。中では、西洋人宣教師による中国語文法研究の成果、江戸末期から明治極初期の欧文典に由来するものもあれば、研究者自身によって案出されたものもある。以下では具体的に検討していく。

表1 明治、大正期の中国語文法書における介詞の名称

書名	刊行年次	名称
大槻文彦解支那文典	明治10年	示處言
金谷昭訓点支那文典	明治10年	示處言
村上秀吉著支那文典	明治26年	示處詞
支那語学文法	明治29年	前置詞
官話文法	明治38年	縮合字
清語文典	明治38年	前置詞
清語正規	明治39年	前置詞
支那語文法	明治41年	前置詞
北京官話文法· 詞編	大正8年	前置詞
北京官話支那語文法	大正8年	前置詞
支那語語法	大正10年	縮合字
支那語文法研究	大正11年	前置詞

2.1 示處言（詞）

「示處言」或いは「示處詞」というのは米国人宣教師Tarlton Perry Crawfordが著わした『文学書官話』の和訳本、『大槻文彦解支那文典』、『金谷昭訓点大清文典』、『村上秀吉著支那文典』に用いられた名称である。この術語は原書の『文学書官話』から受け継がれたもので、定義も原書とはほぼ一致している。

示處言一類的話就是裡、内、内裡、中、中間、外、上、下、周圍、前、後、從、直到這樣的話都是屬一個名頭而且顯出別的名頭的地處或是形勢的地處來[1]

示處言ハ一個ノ名頭二属シテ且ツ別ノ名頭ノ地處ヲ顕ス言ナリ[2]

示處詞ハ都テ一個ノ名詞二属シ而シテ且ツ他ノ名詞ノ地處ヲ顕出シ或ハコノ形勢ノ地處ヲ顕出シ来ル[3]

---

[1]Tarlton Perry Crawford·張儒珍、『文学書官話』，出版者不明，1869年33頁

[2]大槻文彦、『大槻文彦解支那文典』，新潟：文求堂，1977年15頁

[3]村上秀吉、『村上秀吉著支那文典』，東京：博文館，1893年64頁

「示處言/詞」は文字通りに場所を示す言葉で、原書では名詞の下位分類とされている。例語の殆どが方位詞で、「従」、「直到」のような介詞も挙がっている。

2.2　綰合字

「綰合字」は明治 38 年に刊行された『官話文法』に取り上げられた言葉である。著者の田中慶太郎は以下の定義を施している。

> 此字用于主施主受两字之間而将動字用于句尾
> 你和他説　他給我買　房子叫火燒了　把書拿來[4]

現代中国語文法の見方では、介詞の働きが、動作に関与する人や物、或いは場所、時間などを導き、それと介賓構造を組み立てて述語を修飾することである。それとは対照的に、田中は「綰合字」のことを「主施」と「主受」、換言すれば動作や行為の仕手と受け手を結び付ける機能を持つものと捉えている。例示してみると、現代中国語文法に即しては「他丨給我丨買」と理解すべきであるのに対して、田中による定義を踏まえれば「他給我丨買」となる。田中が介詞のことを性質上連詞に近いものと認識していることは明白である。

『支那語語法』でも介詞が「綰合字」という名で呼ばれている。

> 綰合字トハ或動作ノ場所、對手方、使用材料及ビ其他ノ名詞二前置セラレテ助字トナリ主格ト其動作トノ中間二立チテ媒介ノ作用ヲ為スモノヲイフ[5]。
>
> 和、上、在、打、拿、給、為、叫、把等ハ動作ノ附属詞ヲ其動詞二結付クル為メノ助字二シテ即チ綰合字ト称スルモノデアル[6]。

「綰合字」という名称が『官話文法』と『支那語語法』にしか見受けられないので、宮島が田中による用語を借用した可能性は考えられる。尚、宮島は介詞の来るべき位置が動作の場所、対象、道具などを表す名詞の前にあると述べた上に、介詞の働きを「媒介」という言葉で表現している。ここで言う「媒介」とは何のための媒介かというと、「動作の附属詞」、即ち「綰合字」によって提示される動作が行われる場所、動作の対象、動作を実行するために頼りとする材料や道具等を表す語と、その後に続く述語を結び付けるための「媒介」である。要するに、同様に「綰合字」が使われたとしても、田中は動作主と受動者との連結に焦点を合わせたのに

---

[4]田中慶太郎、『官話文法』，東京：救堂書屋，1905 年 12 頁
[5]宮島吉敏、『支那語語法』，東京：干城堂，1921 年 202 頁
[6]宮島吉敏、『支那語語法』，東京：干城堂，1921 年 202 頁

対して、宮島は介詞によって導かれた介詞賓語と述語との繋ぎ合わせに重点を置いたのである。

2.3 前置詞

「前置詞」は使用頻度の最も高い術語である。『日本文法大辞典』における「前置詞」の項に「西欧語で、名詞または代名詞の前に置かれ、これらの語とほかの語の関係を示す語。Prepositionの訳語」[7]という解釈が載せられている以外、山東（2002）も「前置詞」が英語の「Preposition」に対する訳語である[8]と述べている。

これまで調べたところ、文久 2 年（1862）に刊行された日本初の本格的英和辞典『英和対訳袖珍辞書』では、「Preposition」に対して「前置辞」が当てられている。開成所版『英吉利文典』も同年度に出版されたが、和訳は付いていない。阿部友之進が『英吉利文典』に訳を施し、訳書『挿訳英吉利文典』を刊行したのは慶応 3 年（1867）のことである。中では、「Preposition」が正に「前置詞」と訳されている。仮に「前置詞」が真に「Preposition」の訳語とすると、以上は「前置詞」の最早の記録のはずである。ところが、英文典より半世紀も先行する蘭文典や蘭和辞書には、既に「前置詞」或いはそれに類似した表現が見受けられたのである。

表 2 江戸末期の蘭文典における「前置詞」の使用[9]

書名	訳語	編者、訳者	刊行年次
蘭学	前置の語	藤林普山	文化 7 年
和蘭文典前編	Voorzetsels	箕作阮甫	天保 13 年
和蘭文典前編(訳書)	前置詞	不詳	嘉永 2 年
和蘭字彙	前置詞	桂川甫周　同国幹	安政 2 年
和蘭文典字類	前置詞	飯泉士譲　高橋重威	安政 3 年
点訓和蘭文典	前置詞	総摂館	安政 4 年

「前置詞」という訳語が果たして蘭学、英学のどちらに拠るものであったかというと、以上から窺えるように、蘭語の「Voorzetsels」の訳語として現れたのが先で、其の後英文典の訳書にも採り入れられたと判明できる。

江戸期に行われていた蘭学や英学における文法研究の中で誕生してきた品詞訳語名の多くは明治以降の日本文典にも直接に受け継がれたが、「前置詞」はそのまま受け入れられずに、名称の変更がなされている。

---

[7]松村明、『日本文法大辞典』，東京：明治書院，1971 年 390 頁

[8]山東功、『明治前期日本文典の研究』，大阪：和泉書院，2002 年 137 頁

[9]表 2 は古田東朔（1957）、「洋文典における品詞訳語の変遷と固定」，『香椎潟』第 3 号，1957 年 3-7 頁を参照した上、作られたものである

表 3　明治期の日本文典における助詞の名称

書名	品詞名	編著者	刊行年次
絵入智慧の環	あとことば	古川正雄	明治 3 年
大倭語学手引草	後置詞	中金正衛	明治 4 年
太田氏会話編	前詞	太田随軒	明治 6 年
山田氏文法書	後詞	山田俊三	明治 6 年
日本消息文典	後詞	藤沢親之	明治 7 年
日本文典	後詞	中根淑	明治 9 年
小学科用日本文典	後置詞	春山弟彦	明治 10 年
小学文法書	後置詞	中島操	明治 12 年

上掲の品詞名は日本語の助詞を称するのに用いられたものである。『太田氏会話編』のような、そのまま「前詞」として取り入れたものもあるが、その大半は「後詞」や「後置詞」というように名称を変えたのである。なぜこのような「前」と「後」の変換が生まれたかというと、日本語の助詞は、前置詞のように前に付くということなく、その添う語のあとに来るので、日本文典の編著者らはそのまま「前置詞」として取り入れるのに抵抗感があり、一部分の改変を行ったのではないかと推し量る。

ところで、本来蘭文典の訳書に起源する「前置詞」が日本文典にそのまま応用されなかったとはいえ、日本人研究者に中国語の介詞を呼ぶのに使用された。それはなぜかというと、中国語の「前置詞」に付けられた定義からその理由を知り得る。

> 前置詞トハ常二名詞若クハ名詞相等語（目的語）ノ前二置カレ人或ハ事物ト他ノ語トノ関係ヲ言ヒ表ハス二用ヒラルルモノナリ。把這个拿去二於ケル把ハ之ヲ前置詞ト云フ[10]。
>
> 前置詞トハ、或事物か其動静二ヨリテ、他ノ事物二及ホス関係を示ス詞二シテ、即チ名詞代名詞等ノ、或他ノ事物二対スル、空間、時間、方法、原因等ノ関係ヲ、明瞭ナラシムル詞ナリ[11]。
>
> この類の詞は何時でも名物詞や受事的称代詞の前に来て、人とか事物、その話に関係ある事を表示するのである[12]。

介詞がいつも名詞の後に用いられる日本語の助詞と異なり、常にそれが導く語の前に置かれ、文のほかの部分とはどういった関係にあるかを示す役割を果たすのである。換言すれば、中国

---

[10]石山福治、『支那語文法』，新潟：文求堂，1908 年 2 頁

[11]啊麼徒、『北京官話文法· 詞編』，新潟：文求堂，1919 年 175 頁

[12]米田祐太郎、『支那語文法研究』，大阪：大阪屋号書店，1922 年 109 頁

語の介詞は、名詞に対する位置関係の上でも、機能の上でも、洋語の「前置詞」に該当するものであるため、この名称が与えられたのではないかと想定できる。

しかしながら、表 1 に列記される文法書の大半より 10 数年も前に、中国国内に於いて、「介字」という術語は既に現れたのである。馬建忠は『馬氏文通』(1898) で「介字」という品詞部門を定立させ、「介字」を、「介字雲者、猶為実字之介紹耳」[13]、即ち実字を紹介するものと説明している。また、日本人の論説には『馬氏文通』に拠ったところが見受けられたことは別稿でも述べられた通り、日本人は『馬氏文通』を参照し、しかも有用な記述を自著に取り入れたことも事実である。しかし、『馬氏文通』以降の書物は「介字」を採らずに、蘭学と英学を中心とした洋学研究の風潮下で創られた「前置詞」を中国語の文法書に於いても同様に使用したことからすれば、洋文典の影響は明治期における日本文典の編纂に直線的に繋がっているのみならず、当時胎動期を迎え始めた中国語文法書の編述にも及んだことが窺える。

3. 介詞の所属

日本人による中国語文法書群に於いて、介詞を独立した品詞部門として立てられたものは 8 冊あり、全体の半分を超えている。ほかには、介詞を助動詞、助詞に帰属させた著述も少なからずある。

3.1 一品詞として立てられた場合

『金谷昭訓点支那文典』と『村上秀吉著支那文典』で「示處言/詞」が一品詞として扱われたのは原書『文学書官話』の翻案である。田中慶太郎の『官話文法』では「綰合字」は 10 品詞中の 1 種として認められている。宮島吉敏は『支那語語法』で語類を 15 種に分け、「綰合字」はその中の一部類である。『清語正規』に於いて、品詞の類別はしていないが、語釈を行うと同時に、これが「前置詞」で、あれが「助詞」であると言葉が所属すべき品詞類を明確に示している。石山福治の『支那語文法』と啊麼徒の『北京官話文法· 詞編』でも、「前置詞」は独立した品詞部門として認められている。

3.2 助動詞の一類に帰された場合

表 4 助動詞と見做された「叫」、「讓」、「被」の用例

書名	編著者	例文
清語正規 (1906)	清語学堂速成科	你別叫他生氣、那小孩兒叫狗咬了、 那個官被上司參了
支那語文法 (1908)	石山福治	叫他買去、叫人騙了、被官查出來了

[13]馬建忠、『馬氏文通』, 北京：商務印書館, 1983 年 246 頁

北京官話文法· 詞編（1919）	啊麼徒	他被大家罵了、賊叫巡捕拿住了、我的帽子讓風刮去了、叫他拿來、我讓他上那兒去了
北京官話支那語文法（1919）	宮脇賢之介	他一家子被人殺了、房子叫火燒了、 你叫他上那兒去了
支那語文法研究（1922）	米田祐太郎	這一次我真正被騙了

表 4 に示されるように、動作や行為の仕手を導く介詞「叫」、「讓」、「被」は助動詞として挙げられている。『清語正規』に於いて、「叫」には「何々ヲシテ何々セシム、何々二何々ヲサル」[14]といった二つの働きがあり、「被」は「何々サル、何々二何々サル」[15]という意味を有するというような説明が与えられている。『支那語文法』では、「叫」は助動詞中の「使令ヲ表ハスモノ」と「被受ヲ表ハスモノ」の両方にも挙げられ、「被」は「被受ヲ表ハスモノ」と定義されている。『北京官話文法· 詞編』では、「讓」が新たに加えられ、「叫」と共に「受動ノ助動詞」と「使役ノ助動詞」に兼用できる語例として取り出されている。『北京官話支那語文法』では、「被」は「受身助動詞」と呼ばれ、「叫」は「受身助動詞」と「使役助動詞」の両方にも所属している。『支那語文法研究』における「受身的助動詞」には「被」が挙がっている。このような常に使役や受動の標識として現れる介詞が日本人研究者に助動詞と見做されたのは、日本文典における助動詞の概念とは密接な関係にあると思われる。

日本語文法における「助動詞」という品詞部門の創出は大槻文彦編『言海』の付載文典『語法指南』（1889）に遡ることができる。大槻は「助動詞」の定立について下記のように述べている。

> 凡ソ、此篇二助動詞トシタルモノ、従来ノ語学書中二、スベテ天爾遠波ノ中二混ジテ説ケリ……既二變化アリ、法アリ、又、能ク文章ヲ結ブモノ、コレヲ天爾遠波ノ中二混ズベキ二アラズ……独立ニハ用ヰラレズ、必ズ他語ノ下二就キテ、其意ヲ補助スル用ノモノナレバ、固ヨリ、動詞ニハアラズ、因テ今ハ、助動詞トシテ、一門二立タリ。

『語法指南』に用いられたことを嚆矢に、「助動詞」は一品詞として立てられ、「たり」、「ぬ」、「ず」、「む」、「しむ」のようなものも「て」、「に」、「を」、「は」等の助詞類から引き離されることができた。「助動詞」は更に九つに下位分類され、中では、「使役ノ助動詞」（しむ、す、さす）、「受身ノ助動詞」（る、らる）が含まれている。尚、同氏は『語法指南』以外にも、『広日本文典』（1897）、『口語法』（1916）など後世に著しい影響を及ぼした著作を世に出したが、これらの文典にも同様な扱い方が見受けられる。すると、このような取扱いが次第に国文法に定

[14]清語学堂速成科、『清語正規』，新潟：文求堂，1906 年 171 頁
[15]清語学堂速成科、『清語正規』，新潟：文求堂，1906 年 171 頁

着し、文語文法であろうと、口語文法であろうと、使役や受身を表すものは常に助動詞に含まれるようになった。

前述のように、『清語正規』における「叫」と「被」の語釈から、「叫＝しむ/らる」、「被＝らる」といった対応関係が窺える。故に、ここで介詞の「叫」、「讓」、「被」を助動詞としたのは、日本人研究者が日本語文法における「助動詞」の概念と範疇を中国語の研究に引き入れたためではないかと推察する。日本語において使役や受動を表すものは助動詞とされたため、それと同じ働きを持つ中国語の介詞も助動詞と見做された可能性は極めて高いと思われる。

3.3 助詞の一類に帰された場合

信原継雄の『清語文典』には以下のような記述が見られる。

表 5 助詞と看做された介詞の説明と用例

例語	説明	例文
上	この字は日本語のへと云ふ助辞に相當して、「東京へ行く」、「西京へ行く」等の如く、東京、西京と云ふ名詞と、行くと云ふ動詞との関係を補助言明して居る	上東京去 上西京去
打、従、由	之れ等は皆日本語のカラに相當する	打東京来
把	之れは、ヲ又はニテに相當する	把尺寸開出来 把這個鑰匙打開
給	之れは、二の字に相當する	給您請安来

信原は中国語の「上」を、日本語の中でそれと同様に方向や目的を示す格助詞「へ」と対照しながら理解している。「打」、「従」、「由」等、行為、動作の行われる起点を表すものを「から」に対応させ、「給您請安」の「給」という動作に関与する対象を指し示すものを「に」に当たるものと見做す。尚、同氏は日本文典を参考にしたことを以下のように明言している。

> それから一言参考として云って置くが、予が茲に助詞と称へる者は、日本文典の助辞と、助語とのような性質の者が包含せられて居るのである[16]。

即ち、信原が中国語の介詞を助詞と認識したのは、日本文典からの影響によるところが大きい。同氏は日本語の助詞と類似した性質を持つ言葉を助詞と看做し、日本語文法の概念でもって中国語の介詞を捉えているのである。

その上、介詞への取り扱い方を通時的に調べると、介詞を助詞と同類に扱う歴史は長く、こ

[16]信原継雄、『清語文典』，大阪：青木嵩山堂，1905年96頁

のような記述は古くからの文献にも散見できる。例えば、『文則』に取り上げられた助辞の例に、介詞「以」がある。『助語辞』では、介詞「於」、「以」は助詞の例語として挙がっている。『虚字説』、『助字辨略』、『経伝釈詞』に包含された助字の範囲も頗る広く、副詞、介詞、語気詞、嘆詞、更に実詞の一部分まで及んでいる。江戸期の漢学者の著書にも同じような見解が見られる。皆川淇園が『史記助字法』、『佐伝助字法』、『詩経助字法』で語釈を与えたものには、「以」、「用」、「於」、「自」、「従」等の介詞が見受けられる。三宅橘園の『助語審象』に 560 字の「助字標目歌」が載っており、中には助詞，副詞，介詞，連詞，嘆詞、代詞などが含まれている。介詞を助詞と看做した原因をまとめれば、一つは日本語文法における助詞の概念の影響を受けたため、もう一つは古来の取り扱い方を継承したゆえと考えられる。

4. 介詞の範囲

どのような性質を備え、どういった働きを持つ語を介詞的なものと考えていたかは研究者によって異なる見地が示されている。

表 6　中国語文法書群における介詞の語例と用例

書名	例文
官話文法	你和他説，你給我買、您打那兒來，他在那兒住，房子叫火燒了，把書拿來
清語文典	上東京去，打/從/由東京來，把這個鑰匙打開，給您請安來，叫他拿去，被竊
清語正規	打家裡來，往前走，上新橋去，在書房裡念書，把十幾個賊都拏住了，您和他有交情麽
支那語文法	打那兒來了，從你們那兒還有多少裡地，離這兒不很遠，由北京起身，他總不上我們這兒來，往外國去了，到山裡打獵去了，在道上撿了一塊手巾，自從他們走之後，把船上的貨給起下來，和他一塊兒走，跟他商量，同他一塊兒辦事，連一個人也沒有，給他們送去了
北京官話文法· 詞編	府上在那兒住，前兩天打法國回來，老弟從家裡來麽，離這兒有多遠，你靠裡走別靠外走，我是這回由旱路來了，我天天上衙門去，一直往西走罷，我到火車站接人去，臨陣磨槍，趁這麽個時局我們總得擴充利權，我和他要了，今天跟先生告一天假，與我不相干，我要同您一塊兒走，把我怎麽樣，據我的見解他説的沒有理，憑他的口供我找出死鬼來了，照樣子再做罷，我對他講這個理，你給東方人留點面子吧，拿字典找字，用刀殺人，你為我這麽分心，因為這個他不敢來，請您替我辦罷，這比那個好多了，累得連飯也吃不下，除了拼命沒別的法子、匾額上寫的是什麽、樓下是誰在説話、書房裡也沒有他、今天散衙門之後我在某處等您有要緊的話説、我們見面之前他已經知道那件事了、你們仗著什麽穿衣吃飯呢、倚著養蜂採蜜的為生、挨著河邊住、仿著洋法改變了、任著嘴隨便胡説、人

	才都是應著時候出來的、頂著雨走了、冒著李萬的名打搶去了
北京官話支那語文法	我打家裡來，從這兒去遠不遠，我上許先生那兒去，正金銀行往那兒去，我到上海去，你的家離這兒遠不遠，我在大連住，自從庚子年亂之後人家都怕外國人了、爾把東西擱在這兒吧、我和爾借一樣東西、爾跟我來吧、今兒我同他逛廟去了、這件事與他不相干、連一句話也説不出來了、我拏繩子捆他了、用什麽材料做的、爾比我快的多、給人做活
支那語語法	上鐘錶鋪收拾表去，我得到火車站接人去，他們全都往後退了，在屋裡擺著，我和他要了，我跟他商量了，與我不相干，我對他講這個理，您給我拿來，打懷裡掏出手槍來，從六點鐘開到十點，錢糧的額度應由政府定規，自從開闢以來，他比我大兩歲，你拿話勤解他，我為一件事很為難了、叫雨給擾了，你把椅子搬過來
支那語文法研究	他從上海來、他到學校去了、他坐在椅子上、他上那兒去了、爾往什麽地方走、離這兒多少裡地、打那兒來、由天津來的、這孩子向那裡走、他至今沒回來、當冬天的時候兒、自九點鐘開會了、他給我做事、把那個給爾罷、我和他意見不同了、他跟我出去買東西、爾同他不要淘氣、這事與我不相干、連我也不知道、爾比他老得多、這是用甚麽做的

表6から窺えるように、啊麽徒の『北京官話文法· 詞編』に至るまで介詞の範囲が次第に拡大されたことが分かる。『官話文法』では、「和」、「給」、「打」、「在」、「叫」、「把」しか挙がっていないが、『清語正規』では、「上」、「従」、「由」、「叫」、「被」、『支那語文法』では、「離」、「到」、「拏」、「用」、「跟」、「同」、「連」が取り出された。『北京官話文法· 詞編』となると、「靠」、「臨」、「趁」、「對」、「向」、「據」、「憑」、「照」、「為」、「因為」、「替」、「比」、「除了」などが新たに加えられた。それ以降の三書に見出された例語が『北京官話文法· 詞編』ほど広汎ではないとはいえ、動作が行われる時間や場所、動作の間接関渉者、動作の仕手や受け手、動作の進行時に頼りとする手段や方式を導き出すものがほぼ固定したのは特徴である。また、使役や受動に用いる「叫」、「被」は『清語文典』と『支那語語法』にしか見受けられないのは、殆どの研究者はこれらの語を「助動詞」の範囲内に取り入れたためである（3.2を参照）。

もう一つ注意すべきところに、啊麽徒の『北京官話文法· 詞編』に見られた語例には、介詞とは明らかに性質が異なるもの、乃至単語とは言えないものも数多く含まれている。以下で順次に説明してみる。

4.1 「動詞＋着」を取り入れた場合

『北京官話文法· 詞編』において、「動詞＋着」の形をしているものは「分詞前置詞」と名付けられている。

> 你們<u>仗著</u>什麼穿衣吃飯呢、<u>倚著</u>養蜂採蜜的為生、<u>挨著</u>河邊住、<u>仿著</u>洋法改變了、<u>任著</u>嘴隨便胡説、人才都是<u>應著</u>時候出來的、<u>頂著</u>雨走了、<u>冒著</u>李萬的名打搶去了

アスペクト助詞「着」は連述文の初めの動詞の後に用いられ、動作者が次の動作を行う時の状態や方式、換言すれば、動作の起こる背景を提示する働きを備えている。以上の例文における「着」は正にこのような機能を果たしているのである。介詞は原則上「了」、「着」、「過」などのアスペクト助詞を伴うことができないが、一部の介詞、例えば、「随着」、「為着」、「為了」、「本着」、「除了」、「通過」などは「了」、「着」、「過」のつくものである。但し、これらの介詞に含まれる「了」、「着」、「過」は語源から見ればアスペクト助詞であったが、前の動詞とは特約な添着関係によって結合された故、既に介詞そのものの直接構成素に成り切っており、語構成レベルのものに属している。ところが、例文中の「着」は前の動詞と臨時的に隣り合わせたため、文構造レベルのものである。

例のような捉え方は明らかに西洋文法の影響下に生まれた見方である。著者の啊麼徒は、中国語の動詞を語形変化があるものと捉えている。動詞にアスペクト助詞の「着」を附加する形式が動詞の現在分詞形で、また、動詞の現在分詞形は時として前置詞に転用することができる[17]と述べている。即ち、同氏は中国語に於いて動作の進行や持続を表すアスペクト助詞「～着」を、英語に於いてそれと同じ機能を果たす「～ing」に相當するものと理解しているのである。それに、英語には、「considering」、「regarding」、「respecting」、「including」、「during」といったような、動詞に由来し、機能的には前置詞へと文法化した「動詞派生前置詞」が存在する。この類の前置詞も「consider＋ing」、「regard＋ing」、「respect＋ing」、「include＋ing」、「dure＋ing」という現在分詞形をしている。ゆえに、形式上それと同じ構造を為す「動詞＋着」も前置詞の一類として捉えられたのではないかと思われる。

4.2　方位詞を取り入れた場合

『北京官話文法· 詞編』では、「前置詞」が「関係ノ名詞代名詞等ノ前二置クモノ」と「関係ノ名詞代名詞等ノ後二置クモノ」に分けられ、後者の項には以下の例語が挙げられている。

> 匾額<u>上</u>寫的是什麼、樓<u>下</u>是誰在説話、書房<u>裡</u>也沒有他、今天散衙門之<u>後</u>我在某處等您有要緊的話説、我們見面之<u>前</u>他已經知道那件事了[18]

「上」、「下」、「裡」が位置、「後」、「前」が時間を表す方位詞である。ここでは前の名詞やフ

---

[17]啊麼徒、『北京官話文法· 詞編』，新潟：文求堂，1919 年 27 頁

[18]啊麼徒、『北京官話文法· 詞編』，新潟：文求堂，1919 年 184‐186 頁

レーズの修飾を受け、方位フレーズを組み立てるのである。「匾額上」、「樓下」、「書房裡」は「名詞＋方位詞」式の方位フレーズで、「散衙門之後」、「見面之前」は「動目フレーズ＋方位詞」式の方位フレーズである。

啊麼徒がこれらの方位詞を「従」、「在」などの介詞と同一視した点には、西洋文法における「後置詞」の概念との関連性が見られる。「後置詞」とは、「西欧語の文法で、目的語の前におかれて用いられる前置詞に対し、それと同等の機能を持ちつつ、目的語のあとにおかれて用いられる語に与えられた名称」[19]である。例えば、ハンガリー語の「előtt」（～の前に）、「mögött」（～の後に）、「mellett」（～の横に）などは後置詞であり、全て名詞の後に来るものである。また、英語の「through」は基本的には前置詞として使われているが、「all the night through」といえるように、後置詞的な使い方もみられる。ヨーロッパ―諸語には、前置詞を主に使う言語もあれば、後置詞を主に使う言語もある。また、文法的には前置詞と後置詞はともに「接置詞」（adposition）に所属し、唯来るべき位置を異にするだけで、機能上それほどの差はない。啊麼徒はこのような概念の影響の下で、中国語に於いて洋語の後置詞とほぼ同じような役割を果たし、且位置の上でも同様に後置される方位詞を「在」、「従」などの前置詞と同類のものと見做したのであろう。

尚、Joseph Edkins（1864）と馬建忠（1898）も同じ見解を示している。Joseph Edkins の著書『A grammar of the Chinese colloquial language commonly called the Mandarin dialect』の第 2 版では、「心中」、「房中」、「年後」、「心里」、「厨内」、「身上」、「城外」の「中」、「後」、「里」、「内」、「上」、「外」などの方位詞は「後置詞」と称されている[20]。

『馬氏文通』（1898）において、馬建忠は「蠻夷中」、「齒牙間」、「南山下」、「泜水上」、「都門外」等の表現を例に、「又記地記時之語，率用上下左右内外中間邊側等字，綴於地名、人名、時代名之下，蓋無介字為先。蓋上下内外諸字，即所以代介字之用，故泰西文字遇有此等字義，皆為介字」[21]と指摘している。馬建忠は西洋の文法観念を踏まえ、名詞に先行する介詞がない場合、其の後に附く方位詞が介詞のかわりにそれなりの役割を果たすと解釈している。換言すれば、馬建忠は名詞に後続する方位詞も「介字」の一種と認めているのである。

『北京官話文法· 詞編』の「例言」の終わりに、数多くの欧文典及び西洋人漢学者による欧文資料を参考にしたという内容が記されているので、著者の啊麼徒が方位詞を取り入れたのは、上記の二書を直接に参照した上、前人の説を継承したという可能性もある。

---

[19]松村明、『日本文法大辞典』，東京：明治書院，1971 年 223 頁

[20] Joseph Edkins：A grammar of the Chinese colloquial language commonly called the Mandarin dialect (2 ed.)，Shanghai: Presbyterian mission press.1864.135 頁

[21]馬建忠、『馬氏文通』，北京：商務印書館，1983 年 99 頁

5. 終わりに

以上、名称、所属、範囲の三つの面から、明治· 大正期に刊行された中国語文法書群に見られた介詞の捉え方について考察を加えた。結論として取り上げるべき点は大きく三つある。

まず、介詞の名称について、日本人による中国語文法著述では、主として「示處言/詞」、「綰合字」、「前置詞」といった三種の術語が用いられている。『大槻文彦解支那文典』、『金谷昭訓点大清文典』、『村上秀吉著支那文典』に見られた「示處言/詞」は原書の『文学書官話』から忠実に移入したもので、上記の三つの和訳本にしか使われていない。『官話文法』における「綰合字」というのは、介詞には動作や行為の仕手と受け手を結び付ける機能があるという見方に基づき、著者の田中慶太郎自身によって創出された言葉である。宮島吉敏の『支那語語法』にも「綰合字」の使用が見受けられたが、これが『官話文法』から採り入れた可能性も考えられる。使用頻度の最も高い「前置詞」は本来江戸期の蘭文典の訳書において蘭語の「Voorzetsels」に当てられた訳語であり、その後英文典の訳書にも採り入れられ、「Preposition」の訳語として使われるようになった。日本人研究者が『馬氏文通』における「介字」を採らずに、洋文典に由来する「前置詞」を用い続けたことからすれば、蘭学と英学を中心とした洋学研究の風潮は明治期の日本文典の編纂のみならず、当時の中国語文法書の編述にも多大な影響を及ぼしたことが分かる。

次に、介詞の所属について、一部の介詞が助動詞、助詞の範疇内で取り扱われた点から、日本語文法の枠組で中国語の介詞を捉えようとする日本人研究者の意図が窺い知れる。研究者らは日本語文法における助動詞の概念に基づき、日本語における使役の助動詞と受身の助動詞と同じ働きを持つ中国語の介詞「叫」、「讓」、「被」を助動詞の一類に帰したのである。尚、日本文典における助詞の概念を踏まえ、「上」、「打」、「従」、「由」、「把」、「給」など、日本語の格助詞と類似した性質を持つ介詞を同じく「助詞」に取り入れたのである。また、介詞を助詞と同類に扱う記述は中国の古籍にも江戸期の漢学者の著述にも散見できるゆえ、日本人研究者が古来の取り扱い方を継承した可能性も考えられる。

最後に、助詞の範疇について、啊麽徒の『北京官話文法· 詞編』では、「動詞＋着」式の表現、方位詞などが介詞の一類とされている。このような扱い方には西洋文法からの影響が色濃く反映されている。「動詞＋着」式の表現を介詞として扱ったのは、英文法においてそれと同じ構造を持ち、しかも同じ役割を果たす「動詞派生前置詞」の概念を中国語に適用したゆえである。また、西洋文法における「後置詞」の概念の影響の下で、中国語に於いて洋語の後置詞とほぼ同じような役割を果たし、且位置の上でも同様に後置される「上」、「下」、「裡」、「後」、「前」のような方位詞は介詞と見做された。その上、同様な見解は Joseph Edkins（1864）と馬建忠（1898）の所論にも見受けられた故、啊麽徒は前人の説を直接に自著に受け入れた可能性も相当高い。

要するに、日本人による中国語介詞の研究はこのような多重影響の下で展開し、この時期の日本における中国語文法研究の一側面を構成したと考えられる。

『或問』投稿規定

- 投稿資格は、近代東西言語文化接触研究会会員（入会は内田、又は沈まで)。
- 投稿論文は、原則として未公開の完全原稿とし、電子テキストとプリントアウトの両方を提出する。原稿は返却しない。
- 執筆者による校正は、二校までとする。
- 投稿論文は、本誌掲載後、他の論文集等の出版物への投稿を妨げない。
- 原稿作成に当たって、『或問』「執筆要領」を厳守する。
- 原稿料は支払わないが、雑誌を格安価格で提供する。

『或問』執筆要領

1. 使用言語は、日本語、英語、中国語とする。
2. 字数は、16,000 字（400 字詰め原稿用紙 40 枚）までとする。
3. 簡単な要旨（原稿と異なる言語による）を付する。
4. 投稿は、所定のフォーマットを用い、表などは極力避ける。フォーマットは、沈国威までご連絡ください。
5. テンプレートを使用しない場合、テキストファイルの形で提出する。
6. 論文中に中国語などを混在させる場合、Windows は、微軟 PINYIN2.0（簡体字)、微軟新注音（繁体字）を用いること。
7. 注は、脚注を用い、文章の行中に（注 1）のように番号を付ける。
8. 参考文献は、下記の体裁で脚注に付けるか、或いは文末に一括して明示すること。

（単行本）

或問太郎、『西学東漸の研究』，大阪：しずみ書房，2000 年 10-20 頁

Bennett, Adrian A. *John Fryer: The Introduction of Western Science and Technology into Nineteenth-century China.* Cambridge, Mass.: Harvard University Press 1967.

（論文）

或問花子、「東学西漸の研究」，『或問』第 1 号，2000 年 2-15 頁

Fryer, John. “Scientific Terminology: Present Discrepancies and Means of Securing Uniformity.” *Records of the General Conference of the Protestant Missionaries of China Held at Shanghai, May 7-20, 1890*, pp. 531-549.

9. 本文や注の中で、文献に言及するときには、或問太郎 (2000:2-15) のように指示する。同一著者による同年の論著は、2000a、2000b のように区別する。

内田慶市（u_keiichi@mac.com）
沈　国威（shkky@kansai-u.ac.jp）